

「大事なものは、言葉」聖書に学ぶ



「礼拝を習慣づけられたことが財産」と下村俊子さん

焼き菓子のゴーフルで知られる神戸風月堂の代表取締役会長、下村俊子さん(80、1956年卒)にとって、母の母校の神戸女学院は憧れだった。太平洋戦争中、母はベビ

ー服を寂しそうに眺め、「女学院の英語の先生が贈ってくれたもの」とつぶやいた。教わった多くの外国人の先生は戦時中、国に帰ったという。キリスト教系の学校

で、毎朝礼拝の時間がある。「私も入りたい」と受験したが失敗。落ちたものの、試験日に教室で見た「地には平和」という聖書の言葉が心に残った。来年こそはと1年浪人し、合格した。

礼拝は心安らぐ時間となった。高校2年の時、聖書の言葉が文語体から

口語体が変わり、戸惑った。今でも「おのれの如くなんぢの隣を愛すべし」という文語体が体にしみついている。

家を継いでからは忙しい日々を過ごした。仕事に追われ、79歳の時に体を壊して入院。約2カ月の入院中、聖書を読み直した。「改めて自分の『おほさ加減』がわかり、しかられているような気がしました。倒れてから、食べること、寝ることの大切さを実感した。そして「人間にとって大事なものは、言葉や言葉」と。中高6年間の礼拝の積み重ねに今も教わることが多いです」

テレビや執筆活動でも活躍する産婦人科医の宋美玄さん(41、94年卒)は、文化祭や体育祭など



「自由と自主性を大切にする学校でした」と宋美玄さん

の学校行事が大好きだった。一番心に残るのはクリスマス礼拝での賛美歌コンクール。放課後にみんなで練習し、一つになれることが爽快だった。□を開けば「医者になれ」と進路を強制する父は、外科医だった。父の仕事に憧れながらも反発し、ぶつかりあった。だが、ほかに行きたい学部があったわけではなく、高校2年の時に医者を目指すことを決めた。

大阪大学医学部に入學。医者への道を歩み始めた大学2年の時、父が亡くなった。「もっといろいろなることを話しておけば良かった」と言う。

小学生の時は国籍や名字をからかわれることもあった。それがいやで、小学4年から塾に通い、神戸女学院中学部に進学。中学では国籍や名字のことを言う生徒は1人もいなかった。今でも中学、高校の友だちとは仲良し。『芸能人の裏話を教えて』と冗談交じりに聞いてきますよと笑う。産婦人科医になったのは、女性であることが強みになると考えたから。患者さんにおめでとうと言えることに幸せを感じ、医者になって良かったと毎日思う。

(中塚慧、浴野朝香)

◇ 次回は熊本県立熊本高校です。